

アフラシア NEWSLETTER

アフラシア ニュースレター

発行：龍谷大学アフラシア平和開発研究センター <http://www.afrasia.ryukoku.ac.jp/>



第2回 国際シンポジウム開催

オーストラリア、メルボルン



2007年2月23日、オーストラリア、メルボルンのモナシュ大学にて、アフラシア・センターは第2回国際シンポジウムを開催した。シンポジウムのテーマとして「グローバル化する社会で変容するアイデンティティとネットワーク—日常生活における交渉、紛争予防、紛争解決」を掲げ、世界でもっとも多様な文化を抱える都市のひとつであるメルボルンがその開催地に選ばれた。議論の内容は多岐にわたり、学際的であった。なかでも半分以上の報告では、現代の日本社会に関連する議論が展開され、モナシュ大学日本研究センターとの連携の深さがうかがえた。シンポジウムでは、異なる専門分野の研究者のみならず、アーティストやアクティビストをまじえて議論が行われた。ここではシンポジウムのそれぞれのパネルで行われた議論を振り返ってみたい。

アフラシア
国際シンポジウム

グローバル化する社会で変容するアイデンティティとネットワーク—日常生活における交渉、紛争予防、紛争解決—

2007年2月23日 於 オーストラリア、モナシュ大学クレイトンキャンパス、日本研究センター

このシンポジウムの目的は、グローバル化による社会変化とその影響を受けて生じた紛争とネットワークに焦点を当てることであった。情報、文化、そして資源が集団間でやり取りされるあり方には、それがマスメディアの発達であれ移住によるものであれ、大規模な変化が生じている。いま、異なる文化が交差することで生じる紛争や問題を乗り越えていくために、新しい次元の理解と技術が求められているといえよう。複雑さを増す社会の編成とネットワークもまた、既存のパラダイムに収まりきれないアイデンティティの問題を提出している。紛争の形を変え、解決に導くために役立つ新しいアプローチと洞察が求められているのである。グローバル化によってもたらされた幾つかの変化を解明するために、4つのパネルが組織された。

プログラム グローバル化する社会で変容するアイデンティティとネットワーク—日常生活における交渉、紛争予防、紛争解決—

2007年2月23日 9:00-17:30

於 オーストラリア、モナシュ大学クレイトンキャンパス、日本研究センター

■ 開会挨拶／長崎暢子 [龍谷大学アフラシア平和開発研究センター長]

■ 歓迎の挨拶／ロス・マオア [モナシュ大学日本研究センター長]

パネル1 日本の教育環境におけるグローバルローカル関係とネットワーク

司会／マリア・レイナルース・D・カルロス [龍谷大学国際文化学部准教授]

■ 「日本の学校におけるエスニック・マイノリティ間の対話」

岡野かおり [ラトローブ大学准教授]

■ 「未来の不安・親密さゆえの暴力—日本の小学校における移民の子供たちの生活」

青木恵理子 [龍谷大学社会学部教授]

■ 「日本の『他者』を教育すること—人口問題へのひとつの解決?」

ジュリアン・チャブル [龍谷大学国際文化学部講師]

■ 「ローカルな思考・グローバルな夢—アジア太平洋の高等教育における志と現実」

ジェレミー・イーズ [立命館アジア太平洋大学アジア太平洋学部教授]

■ 「21世紀日本の高等教育を管理するネットワーク」

ウィリアム・ブラドリー [龍谷大学国際文化学部教授]

パネル2 つなぎとめる絆—トランスナショナルなアジアの移民のネットワークと送金

司会／ウィリアム・ブラドリー [龍谷大学国際文化学部教授]

■ 「トランスナショナルな移民はネットワークを移しているか?—日本のブラジル人企業家の社会資本の分析を通して」

樋口直人 [徳島大学総合科学部准教授]

■ 「社会を再生産する送金—シンガポールにおけるビルマ人介護士の事例より」

豊田三佳 [シンガポール国立大学アジア研究所上級研究員]

■ 「送金の決定因をめぐる観察調査—フィリピンの事例より」

マリア・レイナルース・D・カルロス [龍谷大学国際文化学部准教授]

パネル3 紛争予防における文化概念の役割

司会／青木恵理子 [龍谷大学社会学部教授]

■ 「ルース・ベネディクトの文化概念と公正な社会におけるその役割」

ポーリン・ケント [龍谷大学国際文化学部教授]

■ 「現代中国でいかに『菊と刀』が解釈されているのか」

濱下武志 [龍谷大学国際文化学部教授]

■ 「紛争・大衆文化・日韓関係—変容するアイデンティティとネットワーク」

時田アリソン [モナシュ大学准教授]

■ 「オーストラリア人のアイデンティティの変容—文学と芸術の観点から」

有満保江 [同志社大学言語文化教育研究センター教授]

パネル4 アイデンティティ・コンフリクト・ディアスポラの政治

司会／清水耕介 [龍谷大学国際文化学部准教授]

■ 「ユダヤ人パレスチナの対話—会話を形作る文化的・民族的・宗教的アイデンティティの役割」

マイケル・ファーマノフスキー [龍谷大学国際文化学部准教授]、マヘル・ムグラビ [The Age]

■ 「ディアスポラのアイデンティティと紛争解決—紛争解決についてのディアスポラ一般理論の可能性」

清水耕介 [龍谷大学国際文化学部准教授]

全体討論 司会／濱下武志 [龍谷大学国際文化学部教授]

◆パネル1

日本の教育環境におけるグローバルローカル関係とネットワーク

このパネルでは、日本の教育に対するグローバル化の影響に関心をもつ、複数分野にわたる5人の学者（岡野かおり、青木恵理子、ジュリアン・チャブル、ジェレミー・イーズ、ウィリアム・ブラドリー）が報告した。5人の報告には共通するテーマがあった。それは、高等教育機関に通う学生の民族や国籍といった背景の変化にともない、現代日本の教育者や政府のエージェントが直面している複雑な問題である。複雑なネットワークをもつ集団として挙げられたのは、在日コリアン、南米出身の新移民（多くの日系人を含む）、出稼ぎ労働者、大学のプログラムに属するアジア人学生であった。報告の焦点とアプローチはそれぞれ異なる学問領域を反映していたが、進行しつつある社会的・人口統計的な変化を日本がまだ把握しきれていないという点は、パネリスト全員に通底していた論点であった。ここで暗黙裡に述べられていたのは以下の点である。すなわち、グローバル化が人口分布と教育システムに影響することで、すでに存在していた差別や無理解が増大しかねない。この問題について日本政府と教育にたずさわる政府当局は解決策を求めていく必要がある、という点であった。



▲（左から）岡野かおり氏、青木恵理子氏、ジュリアン・チャブル氏、ジェレミー・イーズ氏、ウィリアム・ブラドリー氏

◆パネル2

つなぎとめる絆—トランスナショナルなアジアの移民のネットワークと送金

このパネルで聴衆は、アジアにおける移住に関する最新の動向について、3人のアジアの若手研究者から聞く機会に恵まれた。樋口直人氏は日本在住のブラジル人企業家が、日系ブラジル人コミュニティのネットワークを創造的に利用してきたとする最新データを、ミクロな研究から導き出して提示した。そして、豊田三佳氏、マリア・レイナルース・D・カルロス氏という、海外の出稼ぎ介護士に関する先駆的な学者による報告が続いた。豊田氏の研究は、シンガポールで働くビルマ人介護士をめぐる「遅れた結婚・移住・発展」という継続中のプロジェクトの一部であり、従来はフィリピン人の家事労働者に依存していた都市で、ビルマ人女性介護士が増えている理由について洞察を与えてくれた。続いて、フィリピン移民研究では国際的に著名なマリア・レイナルース・D・カルロス教授が報告した。カルロス教授は、長年にわたりフィリピンからの海外出稼ぎと、出稼ぎ労働者たちの送金がフィリピン経済と社会にもたらす影響を研究してきたが、その先駆的な調査データが紹介された。このデータによって、雇用市場のグローバル化がいかに社会全体に波紋を広げるのか、というもっとも明らかな事例のひとつをわれわれは深く理解することが可能になった。



▲（左から）樋口直人氏、マリア・レイナルース・D・カルロス氏、豊田三佳氏

◆パネル3

紛争予防における文化概念の役割

このパネルは、2人のアジア人と2人のオーストラリア人で構成されている。彼らの研究そのものが、アジアと西洋との間の文化伝播がグローバル化していることを示している。著名なルース・ベネディクト研究者であるポーリン・ケント教授は、1930年代のベネディクトの初期の仕事が、社会に進歩的な変化と公正さをもたらす文化のメカニズムを明らかにしようとしていた点を示した。この思想は、日本文化に関するベネディクトの独創的な著作である『菊と刀』（1946年）でも展開されており、戦時中のプロパガンダが築き上げた日本に対するステレオタイプを和らげる主要な役割を果たすことになった。続いて濱下教授は、ベネディクトの本が中国の日本研究者に読まれている興味深い状況について紹介した。それは、中国人の学者が欧米のチャンネルを通して日本文化を見て議論するという、きわめてまれな事例であった。時田教授は、近年のグローバル化がもたらした日本と韓国の間の大衆文化（とりわけテレビドラマ）の交流という、きわめて時局的な話題を取り上げ、2つの文化の新たなイメージが政治的な合意を越えて日韓関係の改善に役立つのではないか、と問いかけた。

オーストラリア滞在経験があり、日本で活躍する文学者である有満教授は、2人の白人のオーストラリア人が書いた小説を例に、オーストラリアにおける多文化主義の影響に関して論じた。この小説には作者の出自であるウクライナとアボリジニーの人物が登場する。この事例は、文化の真正性をめぐる問題として、日本へ行かずして日本を描いたルース・ベネディクトと対比して議論された。



▲(左から) 濱下武志氏、有満保江氏、時田アリソン氏、ポーリン・ケント氏

◆パネル4

アイデンティティ、コンフリクト、ディアスポラの政治

このパネルは日本在住のユダヤ人の学者とオーストラリア在住のパレスチナ人による共同報告である。2人の報告者がそれぞれのディアスポラ共同体で、いかにアイデンティティを形成し、当初のそれを乗り越えてきたのか、という点に焦点が当てられた。マイケル・ファーマノフスキー教授は、旧英国植民地である南ローデシア（現ジンバブエ）の、シオニストを志向するユダヤ人コミュニティで育てられた。一方、

スコットランド人とパレスチナ人の血を引くマヘル・ムグラビ氏は、イギリスで教育を受け、オーストラリアで活躍するジャーナリストである。2人の学者／活動家は、2005年ユダヤ人とパレスチナ人との和解に向けた活動に参加してメルボルンで知り合い、政治的・個人的に共鳴する。報告では、離散的な家族と共同体の生活の中に、パレスチナ人とイスラエル人との複雑な対立が影を落としていた状況がそれぞれ語られ、その統合が試みられた。イデオロギー的に硬直した共同体への部族的な忠誠心と、イスラエル人とパレスチナ人、またディアスポラとなったユダヤ人とアラブ人との政治的な葛藤という現実世界の緊迫した状況とのほざまで、アイデンティティがいかに、またなぜ変化してきたのか、という点が強調された。彼らの報告を受けて、清水耕介教授は移り変わるディアスポラのアイデンティティが、紛争に関係する民族的・宗教的・国家的な集団にヴィジョンを与え、いかに紛争解決に貢献しうるのか、という点を示した。



▲(左から) マイケル・ファーマノフスキー氏、マヘル・ムグラビ氏、清水耕介氏

きわめて広い範囲にわたる研究者とテーマが集められた第2回アフラシア国際シンポジウムは、グローバル化とそれにともなって常に揺れ動くネットワークを理解することが将来の紛争予防と解決の鍵となることを示し、当初の目標を見事に達成して成功裏に閉幕した。アフラシア・センターは、参加者と運営者、特に会議を意義深いものにしてくださったモナシュ大学の方々に感謝の意を表したい。今後もモナシュ大学日本研究センターとアフラシア・センターとの関係が継続し、共同研究が発展していくことを願ってやまない。

(マイケル・ファーマノフスキー)

特別企画「仕事も恋も子育ても」

2007年5月12日、本センターは、深草学舎の顕真館にて特別企画「仕事も恋も子育ても」を開催した。この特別企画は、3部構成（第1部：映画上映『ベアテの贈りもの』、第2部：基調講演、第3部：パネル・ディスカッション）からなるプログラムで、いかに男女が協力して、仕事、恋、子育ての鼎立を実現することができるのか、その方途を模索した。なお、詳細については、『シンポジウム報告書』（アフラシア研究シリーズ2）として近日刊行予定である。



映画『ベアテの贈りもの』（藤原智子監督作品、92分）

この映画は、ベアテ・シロタ・ゴードン氏が書いた男女平等の条文（日本国憲法第24条）を大きな後ろ盾としながら、戦後の日本の女性たちが、女性の地位向上と男女平等社会の実現のためにやってきたさまざまな活動の軌跡とそこにさざげられた情熱の記録である。

基調講演

赤松良子氏「女と男が開く未来—よりよい社会実現のために法律のできること」

赤松良子氏は、東大卒業後に上級公務員となり、労働省婦人少年局長時代には、男女雇用均等法の成立に深く関与した経歴をもつ。また、ウルグアイ特命全権大使を務めたほか、文部大臣（細川内閣と羽田内閣）としても活躍され、2003年秋には女性として初めて旭日大褒章を受章した。現在は、「ベアテの贈りもの」製作委員会代表、女性の政治参加を支援するネットワーク「WinWin」代表、国際女性の地位協会会長などを務めており、主な著作に『うるわしのウルグアイ』（平凡社）や『均等法をつくる』（勁草書房）などがある。

今回の講演で赤松氏は、1985年に成立した男女雇用均等法の立法過程を振り返り、1997年に行われた同法改正の意味合いを考察した上で、法律に「できること」と「できないこと」とは何か、私たちに問いかけた。



まず、赤松氏は、男女雇用均等法の成立にあたって、日本国憲法第14条と第24条の重要性を強調した。これらの原文は、今から約60年前、当時弱冠22歳のベアテ・シロタ・ゴートン氏により書かれたもので、第1部で上映した映画『ベアテの贈りもの』の主人公である。赤松氏は、ベアテ氏からの「贈り物」である14条と24条が存在しているがゆえに、日本の女性の地位は維持されただけでなく、向上していると述べた。その1つの証左が、男女雇用均等法の成立である。

14条は、性別による差別を禁止しているが、それはあくまで政府と国民との関係においてであって、雇用者と被雇用者との関係ではない。そのため、1980年代までの女性は、結婚退職制や若年定年制といった差別を職場で受けていた。だが、1979年に国連で女性差別

撤廃条約が締結されたことにより、14条に追い風が吹くこととなる。なぜなら、同条約の第11条は、職場での女性差別をなくすための国内法を定めなければならない、との義務を締約国に課していたからである。したがって、日本が女性差別撤廃条約を批准するためには、職場における女性差別の根絶を目的とした法律が必要であった。

そこで、制定されたのが1985年の男女雇用均等法である。この法律は当初、「牙のない法律」と批判された。男女雇用均等法は、「強行規定」ではなく、単に「努力義務規定」を多く述べているに過ぎなかったからである。法律というものは、努力義務規定よりも強行規定のほうが、効力の強いことはいうまでもない。しかしながら、強行規定の義務を課した場合、男女雇用均等法そのものが成立しない可能性があった。また、男女雇用均等法の不成立は、女性差別撤廃条約を批准できないことにはならなかった。そのため、妥協の産物として「努力義務規定」にとどまった、と赤松氏は語った。

その後、1997年に男女雇用均等法は改正され、すべての条項が「強行規定」となる。赤松氏は、1985年の法律があったからこそ、1997年に「強行規定」となることが可能であった、と述べた。1985年のときに「努力義務規定」に反対した企業が、1997年に反対しなくなったのは、努力義務であろうと差別することはよくないと規定されていたからである。

この男女雇用均等法のおかげで、それまで就業できなかった多くの仕事に、たくさんの女性たちが就くようになっていく。これが法律の「できること」である。他方で赤松氏は、法律には「できないこと」があって、それは法律を「生かすこと」であると指摘し、男女雇用均等法を生かしていくのは私たちである、と述べて講演を締めくくった。

パネル・ディスカッション

「仕事も恋も子育ても—性にまつわる紛争と和解の文化論」

第3部では、青木恵理子氏（龍谷大学社会学部）を司会として、4人のパネリストが報告とディスカッションを行った。

まず、久場嬉子氏（龍谷大学経済学部）は、「働きながら女と男」と題する報告を行った。久場氏は、男女平等を考える場合に「男性並みの働き」という基準が設定されているが、その基準となる男性並みとはどのようなものなのかを検討する必要がある、と指摘した。なぜなら、男性並みに働けば、男性であれ女性であれ、非人間的な生活を送る危険性があるからである。また、久場氏は、妻と夫がともに人間的な生活を送ることができるようなチームワークや、働き過ぎの「正規労働者」と十分に働くことができない「非正規労働者」とのチームワークを組んでいくことが重要である、とも述べた。



次に、ナディア・ウェルホイザー氏（龍谷大学経済学部）は、「日本の男女は自由になったか？」というタイトルの下、ドイツの女性と比較して、日本の女性のライフスタイルを考察した。たとえば、事実婚についていえば、日本では法的に保護されていないのに対して、ドイツでは「認定されたパートナーシップ」として法的保護の下にある。また、フェミニズムは1970年代に隆盛したが、ドイツでは広く一般社会に浸透していった一方、他方で日本においてはインテリだけに浸透していった、との興味深い点も述べられた。

ジュリアン・チャブル氏（龍谷大学国際文化学部）は、「日本で子育て真最中—国際化の中の家族と教育」と題して、ニュージーランドでは「仕事も恋も子育ても」の鼎立が可能であると報告した。チャブル氏によれば、それには2つの理由がある。第一に、経済的な理由である。ニュージーランドの平均的な家の購入価格は、日本と同じく約3,000万円と高額であるため、政府は様々な政策で共稼ぎをする夫婦をサポートしている、という。第二に、文化的な理由である。ニュージーランドの人たちには「DIY (Do It Yourself)」という考え方があり、男性も自ら子育てすることが述べられた。

最後に、黒岩秩子氏（「大地塾」主宰）は、「7人の子どもを男女同じに育てたら？—その実験結果」というタイトルで報告を行った。黒岩氏は、シモーヌ・ド・ボーヴォワール氏による「人は女に生まれるのではない、女になるのだ」を証明したかったと述べて、7人の子を産み育てた自らの体験を語った。さらに黒岩氏は、夫婦とは、あくまで違いをもった人間同士であるため、お互いを理解するには時間も根気も必要であるし、ときには喧嘩をしなければ理解はし合えない、とも述べた。

フロアを交えたディスカッションでは、子どもを育てていく上で個性をどのように扱っていくか、育児休暇をめぐる現状と問題点とは何かなどについて議論が行われ、大いに盛り上がった。なお、センター長の長崎暢子氏が閉会の挨拶で述べたように、女性だけでなく男性も「仕事も恋も子育ても」の鼎立を考えることが求められていることは、いうまでもない。（PD 佐藤史郎）

第1回 PD・RA座談会

会場：龍谷大学アフラシア平和開発研究センター（智光館B101）

参加者：博士研究員（PD）…岩谷彩子、佐藤史郎

リサーチ・アシスタント（RA）…内田晴子、山中大輔

2007年8月30日、龍谷大学アフラシア平和開発研究センターにて、PDとRAが一堂に会して座談会が行なわれた。アフラシア・センターを支えているスタッフの視線から、センターの現在と未来について語ってもらった。（司会：岩谷、S：佐藤、U：内田、Y：山中）



司会：それでは、アフラシア平和開発研究センターで勤務されるようになったいきさつについて簡単にご紹介ください。

Y：私は2005年6月の立ち上げ時からRAとして参加しています。主に2班の研究会の手伝いやHP整備を行なっています。

U：私は2005年の10月頃からです。2005年9月までフィリピンに住んでいて、海外からの応募となりました。

S：2007年5月からPDとして勤務しています。もともと2006年に龍谷大学に非常勤で来ていて、アフラシア・センターのことは知っていました。初めて参加したのは、2007年の1月にあった研究会で、面白そうだなと思ったのがきっかけでした。

司会：ご自身の専門分野とセンターでのお仕事との関連について、お願いします。

S：私の研究テーマは、安全保障と軍縮です。紛争と軍縮は相互補完的であって、軍縮をすることによって紛争解決を導くことは可能です。現実には、紛争解決をしてはじめて軍縮をすることができる、ともいえる。どちらが先かではなくて、どうやって状況に合わせていくか、ということが重要ではないかと思えます。紛争を解決するためのアフラシア的なアプローチに対して理論的に貢献する、というのが現在の仕事内容です。

A：内田さんは、紛争が多発する地域でもあるフィリピンにずっといらっしゃったわけですが、その後でこの研究センターに入られたというのは、何か関連性があったんでしょうか。

U：応募するときには確かにありました。私の専門領域は東南アジアの地域研究、特にフィリピンの現代政治と政治史です。フィリピンのなかでの武装勢力や反政府勢力、フィリピン政府とそうした勢力との和平交渉も見えてきました。そういう意味で、センターに応募したときは、これはつながる！と思って張り切って履歴書に書いたのを覚えています。でも実は入った当初はセンターも始まったばかりで、すぐに平和構築につながるプロジェクトがあったわけではなかったんです。ただよかったのは、センターのメンバーの中に、フィリピンを切り口にしているような研究会を組織される先生がいらっしゃって、自分の研究の幅を広げることになりました。自分の予想しない形で、アフラシアのプロジェクトと自分の研究とが繋がった、という感じです。

Y：私は、移民と受け入れ社会の住民との共生、紛争解決を主な研究テーマにしています。そういう意味で、アフラシアが掲げる紛争解決

というのは関心が高いテーマ、自分の経験に近いテーマです。移民をテーマにした研究会や同じような関心をもつ人との出会いもあり、勉強になっています。個々の紛争解決の事例をどのように自分のテーマと関連づけるか、が課題ですね。

司会：アフラシア・センターの研究環境で、特徴的な点がありますか？

S：地域研究の人が非常に多いということでしょうか。最初は戸惑いましたが、すごく学際的な環境で、地域研究の人にとっても、他地域の研究から刺激を得られる機会になると思います。

司会：地域研究の立場からアフラシア・センターを見た場合はどうですか？

U：紛争解決を目指した地域研究、という課題は、まだあまり明確ではないような気がします。

司会：地域を越えた連帯が見えにくい、ということでしょうか。

S：紛争解決につながるものとして文化に着目したり、ヨーロッパの手法にない紛争解決のあり方をアジアに探る、という研究視角は探られないかなと思います。今後は各班の連帯や議論の前提がもっと共有されなければならないでしょうね。例えば、紛争は常に解決しなければいけないのか、という問題設定もあります。紛争が発生しているレベルが重要で、移民など個人レベル、地域や国家レベル、などを区別する必要があります。アプローチする学問領域の違いもあります。

U：確かに、紛争にはいろんなレベルがあるという視点は新しく感じましたね。

司会：では最後に、現代社会におけるアフラシア・センターの役割を一言で言うと？

U：朝採りのたけのこ。見つけにくいけれども、なかなか見えないけれども、掘るとおいしい。アフラシアという言葉はまだ世間に浸透していないし、アピール力もこれからですが、研究会に来てもらえば、その意義を実感できる。掘り当ててもらえると、いろいろいい面が出てくると思います。

Y：いろんな分野で議論していると、まとまりづらいというマイナス面もあるけれど、逆にプラス面もあると思いますね。

S：諸刃の剣。紛争を解決できれば人々に希望を与えられるけれど、解決が難しいという結論にとどまれば、結局紛争はなくなるのだというシニカルな意見で終わる。剣を担っているのがアフラシアの私たちということですよ。

司会：まさに時代のエッジとなれるかどうか、試されているわけですね。今日はありがとうございました。（PD 岩谷彩子）

アート in アフラシア

2007年9月4日、智光館地下、当センターの正面玄関ともいえる壁面を大胆な書画が飾った。書家の白子谿雪さんによる作品だ。全く装飾がなく、ややもすれば寂しい印象を与えていた壁面に掲

げられたこの力強い作品は、当センターから吹く新しい風を予感させる。向かって右が「湧出」、左が「閃光（ひらめき）」と命名された。（PD 岩谷彩子）



（白子谿雪…毎日書道会会員、奎星会同人、受賞歴：毎日書道展毎日賞、奎星会高橋竹邨賞、奎星会同人特別賞）

■2007年2月3日/第4回SGSD研究会

細田尚美「もう一つのサクセスストーリー:フィリピンにおける人の移動と成功の社会的文脈に着目して」

■2007年2月15日/第3班第3回研究会

「国際人口移動に関する国境を越えた取り組み—フィリピンの事例」
ホルヘ・V・ティグノ「必要だが不十分—フィリピンの在外投票制度」、マリア・ロサリオ・P・バレスカス「越境する家族の拡がり—在日フィリピン人の世界」、マリア・レイナルース・D・カルロス「移民はなぜ送金するのか?—フィリピンへの国際送金の動機に関する実証的研究」

■2007年3月3日/第5回SGSD研究会

関美芳「有機農業者の受け入れにみる農地に対する価値観の相違—茨城県石岡市八郷地区の取り組みを事例として」、河村能夫「貧困削減のための地域開発における地方行政の役割—インドネシア・タカラール県におけるJICAプロジェクトの事例から」

■2007年4月14日/第1回国際セミナー

ローレンス・ブッシュ「『基準』は開発を促進するのか、それとも障害となるのか?」

■2007年4月19日/講演会

平久保正男「日英戦争と戦後和解—かつて殺し合った敵兵同士の和解への道—」

■2007年4月28日/第1班第1回研究会

酒井啓子「イランにおけるナショナリズム」、小泉順子「タイ近代史における歴史叙述とナショナリズム—B. Andersonの議論を糸口として」

■2007年5月26日/第6回SGSD研究会(第3班第1回研究会)

マリア・ロサリオ・P・バレスカス「日本に向かうフィリピン人看護師と介護士—二国間の問題と懸念」、豊田三佳「高齢化と越境する世帯—東南アジアにおける日本人退職者」、松井智子「移民経験をめぐる語りの戦略と重層的リアリティ:タイ・バヤオ県ドークカムタイ郡における帰国者のライフストーリーから」

■2007年6月21日/第2回国際セミナー

「WTO制度下の地域社会における諸問題」
田中敬子「誰のための『食の安全・安心』?—グローバルなフードシステムにいて消費者・国民とは…」、ラリー・バーマイスター「WTOにおけるグリーンボックスの作用:内発的農村開発の機会」、バトリック・ムーニー「食糧安全保障のフレーミング:飢餓、地域共同体、リスク、テロ」

■2007年6月23日/第1回全体研究会

「紛争解決に関する理論研究:展望」
佐藤史郎「国際関係論における紛争解決論(1)—『紛争』とは何か」、本條晴一郎「ハラスメントの理論」、安富歩「孔子とガンジーの思想」

■2007年6月23日/第4班第1回研究会

小林和夫「日本占領期ジャワにおける『伝統の制度化』—隣組制度とゴン・ロコン」、西真如「開発資金配分の民主化は可能か?エチオピアの<住民組織>グラゲ道路建設協会の経験」

■2007年6月24日/第2班第1回研究会

田中耕司「『労働集約型工業化』以前—近世と近代を架橋する農業」、中村尚司「水

利用をめぐる開発と紛争—南インドを中心に」、杉原薫「生存基盤確保型の発展と私的所有権—方法論的覚書」

■2007年7月13日/第4班第2回研究会

熊本一規「日本における共同体の権利」、村尾るみこ「ポスト・コンフリクト国周辺地域に生きる移住民の生計維持—ザンビア西部の慣習的制度のなかでの土地管理の現状から—」

■2007年7月14日/2007年度国内シンポジウム第1弾

「フィリピン介護士受け入れ戦略—アメリカ・シंगाポールからの教訓—さあ、日本はどうする!」
パネリスト:安里和晃、牧田幸文、中井久子、マリア・レイナルース・D・カルロス

■2007年7月28日/第7回SGSD研究会

田中一宏「領域構造の機能について—沖縄戦とその戦後処理を事例として」、岡江恭史「ベトナムにおけるマイクロファイナンスと村落共同体」

■2007年9月16日/第2回全体研究会

(第1班第2回研究会)
「紛争解決と国際倫理の構築に向けて」
池田文佑「世界政治における倫理—その意義と歴史、今日的諸相」、清水耕介「批判理論とヘルベット革命—『生権力』概念を通してみる1989年」、上野友也「人命救助と権力闘争—冷戦終結以後の軍事介入に対する正当化の議論を中心に」

■2007年9月24日/第3班第2回研究会

「孫文と南方熊楠」孫文生誕140周年記念 国際学術シンポジウム論文集 合評会
報告者:武上真理子、緒形康、松居竜五

■2007年10月5日/龍谷大学・ICCR国際シンポジウム

「インドと日本—過去の回顧と未来への展望」
報告者:プリジ・タンカ、ウビンドラ・シン、赤松徹真、バーラティ・ラエ、ラディカ・シンハ、K. T. ラビンドラン、ラヴィ・バステーバン

■2007年10月10日/第1班第3回研究会

マイケル・ファーマノフスキー「和解、賠償、癒し—1985-2005年、米越新時代を促進したベトナム帰還兵の役割」

■2007年10月11日、12日/国際シンポジウム

「経験をつなぐ:グローバル・コモンズとしての森林」
基調講演者:井上真、室田武、講演者:アナ・ガンジャンバン、ジュアン・マニュエル・トレス・ロジョ、コリン・ニコラス、王春峰、マンガラ・デ・ゾイサ、ニョラ・シン、ヘダール・ラウゼン、島上宗子、奥田裕規、山越言、生方史数

■2007年10月13日/第3班第3回研究会

ポーリン・ケント「ルース・ベネディクトの『菊と刀』をめぐって」

■2007年10月20日/第4班第3回研究会

塩田光喜「戦士共同体、ビジネス、土地紛争—バブアニューギニア高地におけるコモンズの発現形態—」、雨宮洋美「タンザニアにおける土地所有権—『1999年村土地法』の規定と村の実態を題材に—」

刊行物

《Afrasia Working Paper Series》

- No.16 Kazuo Takahashi *The Middle East, the Middle Kingdom and Japan*
- No.17 Tomoya Suzuki *Macroeconomic Impacts of Terrorism: Evidence from Indonesia in the Post-Suharto Era*
- No.18 Kenichi Matsui *International Energy Regime: Role of Knowledge and Energy and Climate Change Issues*
- No.19 Kazuo Takahashi *Not the Most Popular Decision: Japan's Ground Self Defense Force Goes to Iraq*
- No.21 Yoshio Kawamura *Participatory Community Development and a Role of Social Statistical Analysis: Case of the JICA-Indonesia Project-Takalar Model*
- No.22 Takashi Inoguchi *The Place of the United States in the Triangle of Japan, China and India*
- No.24 Kosuke Shimizu *Human Security, Universality, and National Interest: A critical inquiry*
- No.25 François Debrix *The Hegemony of Tabloid Geopolitics: How America and the West Cannot Think International Relations beyond Conflict, Violent Identity, and Cultural Imposition*
- No.26 Naomi Hosoda *The Social Process of Migration from the Eastern Visayas to Manila*
- No.27 Chizuko Sato *Forced Removals, Land Struggles and Restoration of Land in South Africa: A Case of Roosboom*
- No.28 Michael Furmanovsky *Reconciliation, Restitution and Healing: The Role of Vietnam Veterans in Facilitating a New Era in U.S.-Vietnam Relations, 1985-2005*
- No.29 Hiroyuki Torioe *Land Ownership for the Preservation of Environment and Livelihood*
- No.30 Kokki Goto (Edited, Annotated, and with an Introduction by Motoko Shimagami), *"Iriai Forests Have Sustained the Livelihood and Autonomy of Villagers": Experience of Commons in Ishimushiro Hamlet in Northern Japan*

※Working Paperとアフラシア研究に関する最新の情報は、本センターのホームページ<http://www.afrasia.ryukoku.ac.jp/>に随時掲載される。閲覧、ダウンロードも可能。

《アフラシア研究シリーズ》

- No.1 岩田拓夫、「植民地境界画定問題とトーゴ人の政治的アイデンティティ形成」
- No.2 石坂晋哉、「ガーデンと自覚のポリティクス—アシス・ナンディのガーデン論をめぐって」
- No.3 嶋田ミカ、「インドネシア女性の海外で稼ぎをめぐる諸問題—中部ジャワにおける聞き取りを中心に」
- No.4 佐藤奈穂、「カンボジアにおける土地登記の進展と女性の権利」

《Afrasia Symposium Series》

- No.1 Proceedings of the First AFC International Symposium
The International Context of Conflicts in the Middle East and Asian Approaches to Conflict Resolution, 4-5 March 2006, Ryukoku University, Nobuko Nagasaki, Hisashi Nakamura and Tosei Sano (eds.)

アフラシアニュースレター 第4号 2007年11月

発行/龍谷大学アフラシア平和開発研究センター
〒520-2194 滋賀県大津市瀬田大江町横谷1-5 TEL/FAX 077-544-7173 <http://www.afrasia.ryukoku.ac.jp/>
編集/Michael Furmanovsky、岩谷彩子、佐藤史郎
印刷/株式会社 田中プリント